群教セ	G05 － 03
	平26.254集
	音楽－小

思いや意図を持って音楽づくりをする児童の育成

――歌唱、器楽、鑑賞活動と関連させた題材構成の工夫を通して――

特別研修員　中山　繭美

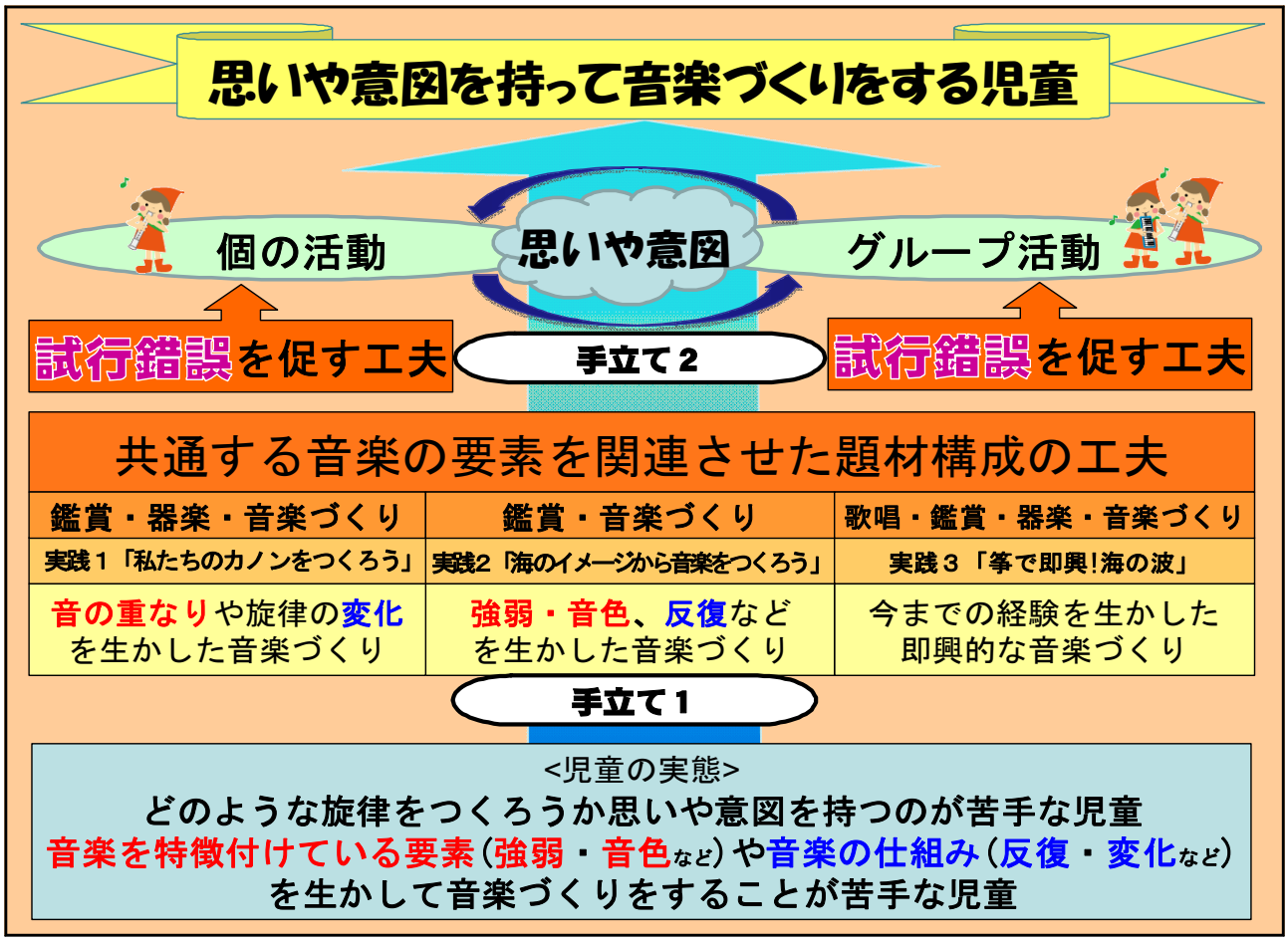
Ⅰ　研究テーマ設定の理由

学習指導要領では、音楽づくりについて「音を音楽に構成する過程を大切にし、〔共通事項〕に示す音楽の仕組みを手掛かりにして、児童が思いや意図を持って音楽をつくるようにすること」の重要性を示している。「はばたく群馬の指導プラン」では、「音楽の要素を手掛かりに音楽づくりをすること」を課題としている。本校では、歌唱や器楽において歌詞の内容や曲想を感じ取り、「このような理由からこんな気持ちで歌いたい」「こんな強弱に気を付けて合奏したい」という思いや意図を持ってそれを表現しようとする児童が育ってきた。しかし、音楽づくりの学習に関しては他の活動に比べ、児童が自らイメージを膨らませて思いや意図を持ち、表現することができる児童が少ない。

そこで、題材構成を工夫することで、児童が歌唱表現や器楽表現、鑑賞活動の様々な場面で〔共通事項〕に示されている音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを繰り返し感受し、試行錯誤を促す場面の工夫を通してそれらを生かして表現を追求する方法を身に付け、自らの思いや意図を膨らませて音楽づくりができるようになるのではないかと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

⑴「私たちのカノンをつくろう」（第６学年・１学期）

①　「音楽を特徴付けている要素や仕組み」を関連付けた題材構成の工夫＜手立て１＞

児童が「カノン」（パッヘルベル作曲）の鑑賞活動、器楽において、繰り返し共通する音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み（音の重なりや反復する和音進行の響き、旋律の変化など）とそれらの効果や醸し出す雰囲気を感受したことで、次の音楽づくりの学習に生かせるようにした。

②　学び合いの工夫（試行錯誤）＜手立て２＞

グループ活動において、個の旋律の工夫を聴いたり、意見を出し合って「私たちのカノン」を試行錯誤しながらつくったりすることで、他の児童の多様な考えに触れ、思いや意図を深めることができると考えた。また、児童が苦手な記譜やリコーダーも、教え合いながら学習を進めることができると考えた。

③　思いや意図を持って表現の工夫をするための工夫（試行錯誤）＜手立て２＞

個の旋律「私のカノン」をグループ６人でつなぎ合わせ、グループの音楽「私たちのカノン」（４拍×４小節×６人分）をつくる。その際、ワークシートを工夫して、「私のカノン」の最後の一音を空欄にして、児童が自然な旋律の流れを試行錯誤する場面を意図的に設定し、思いや意図を持てるようにした。

⑵「海のイメージから音楽をつくろう」（第６学年・２学期）

①　「イメージ」と「音楽を特徴付けている要素や仕組み」を関連させた題材構成の工夫＜手立て１＞

児童は「シェエラザード」から「海とシンドバッドの船」（リムスキー・コルサコフ作曲）の音楽鑑賞によって、海や物語のイメージを膨らませ、物語に登場する人物などを表す各旋律から、音楽を特徴付けている要素（強弱、音色など）や仕組み（反復など）を感じ取って聴く。次に、それら音楽を特徴付けている要素や仕組みを自分のイメージと結び付け、音楽づくりへ生かすことができると考えた。

②　グループの「私たちの海」をつくりながら、個の思いや意図を生かす工夫（試行錯誤）＜手立て２＞

個の思いや意図を生かすために、個がつくった「私の海」の旋律（４拍×２～４　小節程度）を必ず用いて、グループで「私たちの海」の物語を構成させるようにした。また、個がつくった旋律の表現の工夫は、「最終的には作曲者が決める」こととして、個の思いや意図がグループ全体に反映されるようにした。

③　個の思いや意図を共有し合うための工夫（試行錯誤）＜手立て２＞

旋律のイメージが聴き手に伝わるように、楽器を用いて試行錯誤しながら旋律を組み合わせたり、強弱や速度、音色などを工夫したりした際、ワークシートやホワイトボードを用いて個の思いや意図を可視化して共有し合えるようにした。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　歌唱、器楽、鑑賞活動と音楽づくりを関連させた題材構成を工夫した結果、児童が思いや意図を持って旋律をつくったり、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを生かして表現の工夫を考えたりすることができた。

○　ワークシートやホワイトボードを用いて個の思いや意図を共有させながら、意図的に試行錯誤する場面をつくったことは、多様な意見や音を聴き合い、自分の思いや意図に広がりを持たせて表現に生かしたり、自分の考えや願いをより明確にして音楽をつくったりすることに有効であった。

２　課題

○　思いや意図を持っていても十分にそれを表現の技能に結び付けることの苦手な児童がいるので、日頃より表現の技能を高める必要がある。

３　提言

○　個の思いや意図を持ち表現させるためには、個の課題意識を強く持たせることが大切である。

＜授業実践＞

実践１

１　題材名　「私たちのカノンをつくろう」（第６学年・１学期）

教材名　「カノン」鑑賞曲　(パッヘルベル作曲)　「カノン」合奏曲 (パッヘルベル作曲　東山正流　編曲)

「私たちのカノンをつくろう」音楽づくり　（オリジナル）

２　本題材及び本時について

題材の工夫〈手立て1〉

鑑賞・器楽・音楽づくりの三つの内容を組み合わせ、共通する「カノン」という作曲技法を軸に、鑑賞活動や器楽表現を通して、〔共通事項〕の示す音楽を特徴付けている要素（旋律と伴奏の音の重なりや循環する和音〈和声の響き〉)、音楽の仕組み（カノン〈追いかけっこ〉する旋律の変化〈単純な旋律からリズムが細かな旋律へと移り変わる〉）を繰り返し学ぶようにした。次に、鑑賞活動や器楽表現で学んだ音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを手掛かりに、自らの思いや意図を持ってまとまりのある音楽をつくることができるように題材を構成した。

本時は、全８時間の計画の第７時に当たり、「カノン」の旋律をつくる活動の中で、音の重なりや和声の響き、旋律の変化などを聴き取り、それら音楽を特徴付けている要素を生かした「私たちのカノン」の旋律をつくろうとする思いや意図を持つことがねらいとなる。個の思いや意図を大切に、〔共通事項〕の示す音楽を特徴付けている要素を生かした旋律の工夫ができるように、本時の研究上の手立てを以下のように実践の中で具体化した。

３　授業の実際

導入において「カノン」を合奏した。児童がお互いの音をよく聴き合って演奏することで、音楽を特徴付けている要素(音の重なり、和声の響き、旋律の変化など)を感じ取らせ、音楽づくりへの意欲を高めた。

次に、思いや意図、見通しを持って音楽づくりができるように、めあてや活用して欲しい音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み、グループ活動の手順などの授業の流れを板書し、分かりやすく説明した（図１)。

めあて　音の重なりや響きを聴き取り、旋律をつなぎ合わせて「私たちのカノン」をつくろう！

◎音楽の要素と仕組み
- 音の重なり
- せん律の変化
- 和声のひびき

音の数　↓　少ない（単純）
　　▼　多い（細かい）

音楽づくりの手順
①「私のカノン」を発表する。 10分
（おすすめポイントも言う。）
→友だちの良い所や改善点を言う。
②意見を出し合い「私のカノン」をつなげ
「私たちのカノン」をつくる。20分→ﾘｺｰﾀﾞｰで吹く。
③つくったせん律をワークシートに貼る。 2分

図１　坂書の様子

「私のカノン」を発表し合う学び合いの工夫(試行錯誤)＜手立て2＞

グループ（６人)に分かれ、ＣＤ伴奏に合わせて、ワークシートに記入した個々がつくった「私のカノン」（４拍×４小節)の旋律をリコーダーで発表し、聴き合った（図２)。おすすめポイント(自分が工夫した点)についても発表した。

※(＿は児童がどのような思いや意図で旋律をつくったかを伝えているところ)

Ｓ１：やさしい感じを出したいので、あまり音の高さを変えないようにして、二分音符を多く使いました。

Ｓ２：細かなリズムや高い音を入れて明るい旋律をつくりました。

Ｓ３：いいねぇ。リズムが弾んでるから明るい感じに聞こえるね。

図２　個が思いや意図を持ってつくった「私のカノン」を発表する場面

発表後、個々がつくった「私のカノン」の旋律(４拍×４小節)を並べてつなぎ合わせ、どのような演奏順にするとグループとしてまとまった「私たちのカノン」の音楽ができるか考えた。

どのグループも、前時の鑑賞活動で捉えた「旋律の変化」(単純な旋律から細かなリズムの旋律へ変

化)を生かし、「私のカノン」を並べて「私たちのカノン」を構成していた。

思いや意図を持って表現の工夫をするためのワークシートの工夫(試行錯誤)〈手立て2〉

Ｓ１：まずはみんなの「私のカノン」(図３)を適当に並べてみよう。　※(＿は鑑賞や器楽と関連させて児童が考えていること)

Ｓ２：「カノン」の合奏みたいに、旋律が簡単なものから細かいものにしていきたいな。

Ｓ３：どういう順番が良いかな？Ｓ４ちゃんの旋律が細かくて難しいから最後がいいんじゃない。

Ｓ４：Ｓ５・６ちゃんの旋律は似ているね。どっちが先がいいかなぁ。**(みんなで悩む試行錯誤の場面)**

Ｔ　：音の高さに注目しても良いよね。まずは、リコーダーで試して吹いてみたら？

Ｓ５：吹いてみると１段目と２段目は逆にした方が旋律が自然だね。　**(旋律の流れの感受)**

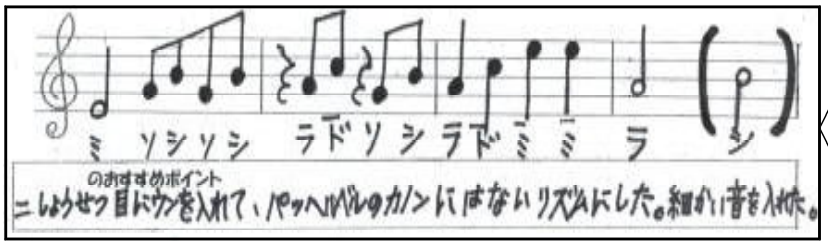


図３　個の旋律「私のカノン」

(　　)の中の音を和音の中から選び(音の重なりや和声の響きの感受)、リコーダーで試しながら次の旋律に自然につながるように工夫しながら音を選んだ。

さらに、ワークシートを工夫して自分の旋律から友達の旋律へ移行する時のつなぎ目の一音(図３の(　)の中の音)を何の音にするか意見を出させた。みんなの意見を参考にし、「最終的には自分の旋律は自分で決める」と約束し、個の思いや意図を大切にすることを確認した(図４)。

「私たちのカノン」を工夫してつくった学び合いの場面(試行錯誤)〈手立て2〉

Ｓ１：(　)の中の音が３段目から６段目まで続けてソの音になっちゃってるね。ソの音が続いていて変じゃない？

Ｓ２：う～ん。変かも。変えた方が良くない？

Ｓ３：でも、Ｖ度の和音から音を選んでいるから、おかしくないんじゃない？　**(全員で悩む試行錯誤の場面)**

Ｔ　：この(　)の中だけ見たら、ソの音が並んでいるから変に思うかもしれないけど、(　)の音を縦に続けて演奏する訳ではないよね。音のつながりをリコーダーで試してみると良いよ！

Ｓ４：じゃあＣＤかけるね。

→ＣＤ伴奏に合わせ、個々の旋律を演奏していった。(和声の響きの感受)

全員：本当だ。３・４段目と５・６段目は同じようには感じないね。

Ｓ５：和音に合う自然な流れの旋律になっているね。(和声の響きの感受)

全員：このままの旋律でいこう！

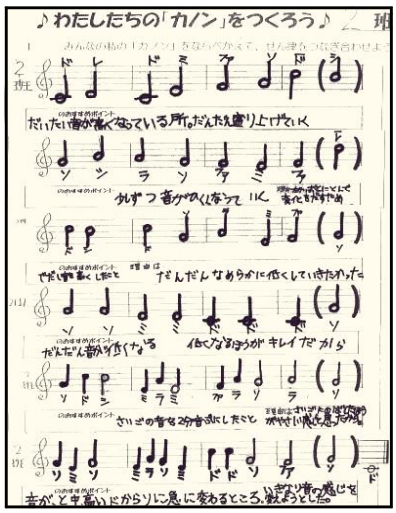


図４　つなげた「私たちのカノン」

最後に、どのグループ（６人）もＣＤ伴奏に合わせて、自分たちの旋律をリコーダーで試しながら吹き、「音の重なり」を聴き取り、「和声の響き」に合った音になっているかを感じ取って、どのような音を入れれば自然な流れになるか音を選んで工夫した。旋律の自然なつながりを意識しながらつくった「私たちのカノン」を通して吹けた時には、みんなで顔を見合わせ、とても満足そうに微笑んでいた。

４　考察

○　題材構成を工夫したことは、児童が鑑賞活動や器楽表現を通して音楽を特徴付けている要素や仕組みを繰り返し学んで身に付け、次の音楽づくりに生かすことができたので有効であった。

○　ワークシートを工夫し試行錯誤の場面を意図的につくったことは、それぞれの思いや意図がより明確に旋律に生かされ、満足感や達成感につながった。

○　個の旋律の最後の一音（つなぎめの音）をグループで考えたことは、児童の多様な考えを引き出すのに有効であったが、グループによっては発言の強い児童の意見に影響されてしまうことがあるので、必ず音を出して試しながら「和音の響きに合った自然な流れの旋律にしたい」「次の音へなめらかにつながるからこの音にしたい」など、個々に明確な根拠が持てるような働きかけをする必要がある。

実践２

１　題材名　「海のイメージから音楽をつくろう」（第６学年・２学期）

教　材　「交響組曲『シェエラザード』から『海とシンドバッドの船』」（リムスキー・コルサコフ作曲　ホ短調－ホ長調）鑑賞

「海のイメージから音楽をつくろう」音楽づくり

２　本題材及び本時について

題材構成の工夫〈手立て1〉

共通する「海のイメージ」を軸に鑑賞と音楽づくりの二つの内容を組み合わせ、鑑賞で学んだ〔共通事項〕の示す音楽を特徴付けている要素（強弱、速度、音色など）や仕組み（反復など）を手掛かりに、音楽づくりにおいて、児童が思いや意図、見通しを持って音を音楽に構成するように題材を構成した。

鑑賞活動では、物語の登場人物や海、波、船の主題を表す旋律が魅力的に展開され、児童はそれらの旋律から、音楽を特徴付けている要素（強弱、速度、音色など）や音楽の仕組み（反復）を感じ取り、海を冒険するシンドバッドの物語などのイメージを膨らませて聴いた。本時は、全６時間の計画の第５時に当たり、個が思いや意図を持ってつくった「私の海」の旋律やイメージを基に、それらを組み合わせてグループで「私たちの海」の物語を考え、鑑賞活動で学習した音楽を特徴付けている要素（強弱、音色など）や音楽の仕組み（反復など）を生かして表現を工夫する力を伸ばすことがねらいとなる。個の思いや意図を基に、〔共通事項〕の示す音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みを生かした表現の工夫ができるように、本時の研究上の手立てを以下のように実践の中で具体化した。

３　授業の実際

導入では、音楽リズムカードを用いて、音楽を特徴付けている要素（強弱や速度）を意識した簡単な音楽遊びをして、児童が音楽づくりに臨む楽しい雰囲気づくりを行った。

次に、児童が見通しを持って音楽づくりができるように、以下のめあてや活用して欲しい音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組み、グループ活動の手順などを板書を用いて説明した（図５）。

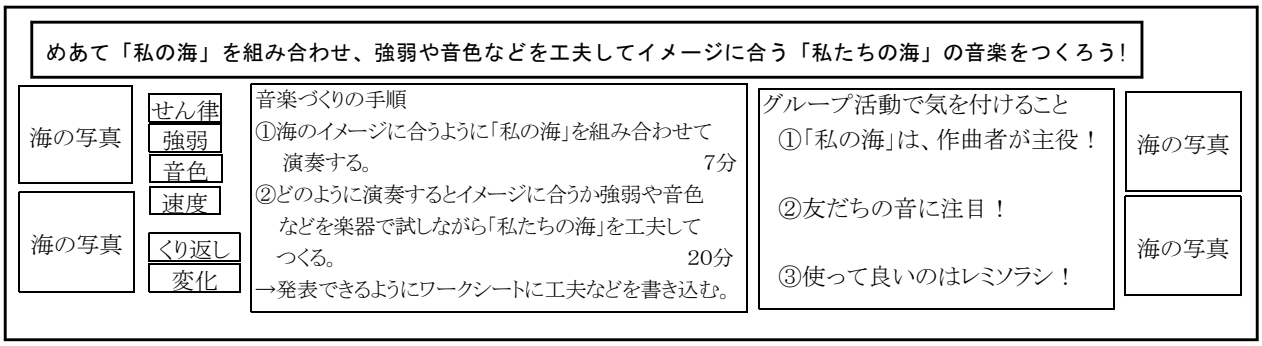


図５　坂書の様子

鑑賞で学んだ音楽を特徴付けている要素を生かしながら、「私の海」の旋律をつくる場面（題材構成の工夫）〈手立て１〉

児童は個々に海の生き物や景色をイメージして、「私の海」（４拍×２～４小節程度）の旋律を五音音階（レミソラシ）から音を選んでつくった（図６）。その際、児童は音楽鑑賞で学んだ音楽を特徴付けている要素（音の高さや、音色など）を手掛かりにしていた。また、イメージを旋律にするためにどのような表現の工夫をしたか、個の思いや意図を明確にするために、ワークシートに書かせるように工夫した。

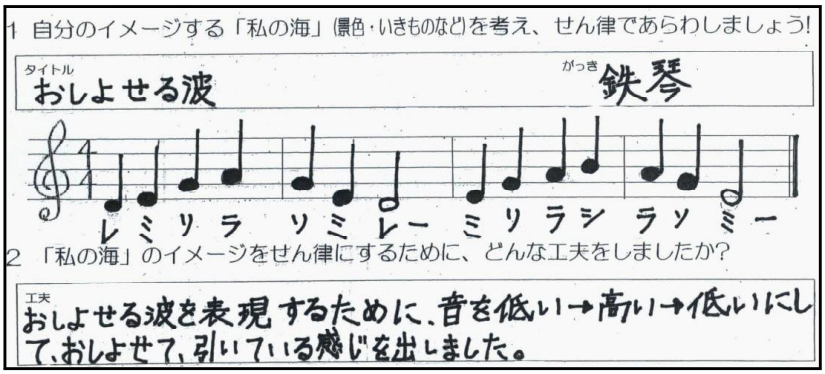


図６　個の旋律「私の海」

児童は、前時でつくった個の「私の海」の旋律をグループ（６人）で持ち寄り、それらを組み合わせたり、つなげたりして「私たちの海」の物語をつくり、どんな音楽にするか大まかな構成をホワイトボードに書きながら考えられるようにした。本時では、前時の構成を実際に楽器で試して決定し、次に強弱や速さなどの工夫を試行した（図７）。発言の強い児童の影響で音楽づくりが進まないよう、「グループで気を付けること」や音楽づくりの手順を記した音楽づくりの手順マニュアル（前頁図５と同様のもの）を用意した。

グループの「私たちの海」をつくりながら、個の思いや意図を生かす工夫（試行錯誤）〈手立て2〉

Ｓ１：まずはクラゲ。次はカニ・・。　※＿＿は個の思いや意図

→　個の旋律が書いてある楽譜をホワイトボードに貼ったり、演奏回数を決めたりする。　（イメージの具体化）

Ｓ２：みんなの旋律を続けて演奏しよう。一緒にやろう！

Ｓ３：波の旋律を先に演奏してからカニの旋律を演奏した方が良くない？　（個の旋律が生かされている場面）

→　物語に合った順番や旋律の組み合わせになっているか確認し、合図で全員の旋律をつなげて一通り演奏し終わったところで拍手が湧いた。

図７　「私の海」の組み合わせて演奏する場面

次に、「私の海」を作成した各児童の思いや意図を基に、グループのイメージした「私たちの海」を表現するための工夫を、音楽を特徴付けている要素（強弱、音色など）を手掛かりに試行錯誤した（図８）。

ホワイトボードなどを用いて個の思いや意図を共有し、グループの音楽を試行錯誤できるようにする工夫〈手立て2〉

１班　※（＿＿は思いや意図をもち音楽を特徴付けている要素を生かした工夫を児童がしているところ）

Ｓ１：私のイメージは押し寄せる波だから強弱を弱くから少し強くするね。→手順カードを見ながらマレットを交換　（強弱の工夫）

Ｓ２：僕のカニは逃げているから、最後は、クレッシェンド。
→考えながら柔らかいマレットからより強さを出せる硬いマレットに変更して試行する。　（強弱の工夫）

２班

Ｔ　：もう旋律の組み合わせは決まったかな？みんなの班は海の一日の様子を表しているから、強弱や速度を工夫すると一日の海の移り変わりが聴いている人によく伝わると思うな。

～みんなでホワイトボードの旋律や絵を見ながら工夫を考える～

Ｓ１：ここを強くしたら、朝から昼って感じにならない？　（強弱の工夫）

Ｓ２：あと、ここは遅いから速いにするのはどうかな？　（速さの工夫）

全員：いい感じじゃない。これで演奏してみよう。

～夜の海を鉄琴の堅いマレットで強く演奏する男子～

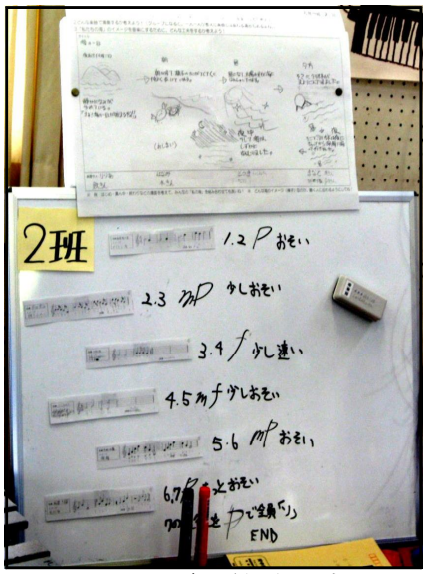


図８　ホワイトボードなどで共有した個の思いや意図

Ｔ　：どうして夜の海を硬いマレットで強くキンキン演奏するの？（教師の想像と違うので質問）

Ｓ３：真っ暗な海の静けさをキーンという音色で表して、何も聞こえない感じにしたいんです。（音色の工夫）

Ｔ　：なるほど。静まり返った感じを緊張感のあるキーンという硬い音で表したんだね。

４　考察

○　題材構成を工夫したことにより、鑑賞で学んだ音楽の要素と結び付けて音楽づくりができた。ホワイトボードなどを使ったことは、グループで個の思いや意図を共有して表現の工夫を試行錯誤することに有効であった。

○　「作曲者が主役！」とし、必ず個の旋律や工夫がグループの音楽づくりに生かされるようにしたことは、個の思いや意図を生かすために有効であった。他の児童に自分の工夫を伝えるために、工夫を書いたワークシートを活用させると、発言が控えめな児童も自信を持って発言できるであろう。

○　グループ間でお互いの演奏を聴き合う学び合いの時間や、客観的に自分たちの演奏を聴くことができる教室環境（場の設定）が準備できると、より良い工夫を共有しながら主体的に活動できるであろう。